

「障害のある性的少数者」の若者がいかに社会運動に参加しているか —日本とドイツにおける LGBT 運動の比較から

欧陽珊珊

立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程

How young “disabled queer/LGBT people with disabilities” participate in social movements

: A comparison of LGBT movements in Japan and Germany

OUYANG Shanshan

PhD student at the Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences of Ritsumeikan University

Abstract

In recent years, there has been attention to the situation of LGBT people with disabilities. However, challenges remain insufficiently examined regarding the mechanisms by Disability and LGBT community can raise their voices and engage in social movements or solidarity. This research conducts a comparative analysis of how young “disabled queer/LGBT people with disabilities” in Japan and Germany to participate in LGBT movements and unearth the potential of small-scale local social movements. This report is based on surveys conducted at Pride Parades across Japan from 2021-2023 and a survey in Berlin in July 2023, where the author participated in local parades and interviewed organizers and participants. The comparison revealed Germany is more advanced than Japan in terms of visibility of disabled queer members and community supporting. Comparing the largest pride parade in the country, accessibility is also better in Berlin more than Tokyo. In Japan, smaller local parades demonstrate inclusive mechanisms and unique features, creating environments conducive to participation by disabled LGBT individuals. This study suggests activism for social justice is not necessarily limited to direct actions or demonstrations and indicates the potential for local and small-scale communities to serve as flexible spaces for youth involvement and activities.

1. はじめに

本研究の目的は、障害者であり、かつLGBTを自認する日独の若者たちが、どのようにマイノリティが主体となる社会運動（とりわけLGBT運動）に参加しているのかを比較し、地方の小規模な社会運動の可能性を掘り起こすことにある。

これまで社会的マイノリティが問題にされる時には、マジョリティによる差別や排除が中心に議論されてきた。80年代のフェミニズムは、マイノリティ内部にも属性の組み合わせによって権力関係が働いていることを問題提起した。その後、人種、階級、性別、宗教、障害、性的指向などは個別的、排他的な存在ではなく、それらが交差し、相互に作用している「交差性（intersectionality）」の視点が多種の研究で強調されてきた（Crenshaw, 1991; Collins and Bilge, 2016; 飯野, 2019）。障害とセクシュアリティの問題も個別に議論するのは

なく、各々を交差させて捉える研究が欧米を中心に始まっている。これらの研究は、二重のマイノリティ性を抱えた当事者には複合的な差別経験があることを明らかにした。さらに、当事者は自分のニーズや期待に合致するコミュニティを見いだすことが難しいと指摘されてきた。一般的にゲイやレズビアンコミュニティは、能力主義、身体的健全性の規範を強調する場合が多い。他方、障害者コミュニティまたは障害者運動では、性の問題をそもそも矮小化する傾向があり、性規範や異性愛規範が強く働いている (cf. Shakespeare et al, 1996; Leonard and Mann, 2018)。両方のコミュニティから疎外されている当事者が、いかに自分の声をあげられるのか、マイノリティ運動への参加や他集団との連帯は可能なのか。そのような課題はまだ十分に検討されていない。

ドイツにおける障害のある性的少数者の実態調査によると、「プライド・パレード (Pride Parade)」は、障害とクィアという二つのシーンを結びつけるための重要な仲介役であると指摘されている (Sülzle and Rudek, 2019)。プライド・パレードとはLGBT運動によって組織されたもっとも可視しやすい、強力な取り組みであり、1960年代に始まった「新しい社会運動」のひとつにみなされている (Stammers, 2009)。現在では世界中で開催されるLGBT運動を代表するイベントとなっている。ドイツのベルリンパレード (Christopher Street Day Berlin) は1979年から開催され、現在では欧州最大規模の同種のパレードとなっている。日本では1994年から東京で開催されている。そこで、本調査では、プライド・パレードに焦点を当て、障害のある性的少数者の若者における運動参加の障壁と実践の多様性について考察し、特に従来から注目されてきた大規模パレード以外の運動の可能性を考察する。

2. 社会的状況の差異

国際的な統計である「LGBTI世界受容指数」を参照すると、2020年の時点でドイツは7.73、世界では20位の受容指数である。日本の場合は5.26、世界では53位で、シンガポール、タイの後となっている (Flores, 2021)。

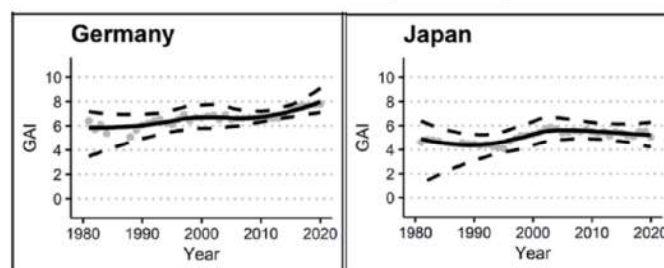


Image: TRENDS IN ACCEPTANCE FOR EACH COUNTRY, the Global Acceptance Index of LGBTI (Flores, 2021, p.38; p.40)

ドイツでは2001年に生活パートナーシップ法が制定され、2017年に同性婚法を導入し、現在ドイツ政府は「LGBTIインクルージョン戦略」を採用している。OECDの調査は、「ドイツでは、反LGBTI+差別と暴力が何百万人の幸福を妨げ続けている現実があるが、LGBTI+の平等に向けての法的・政策的成果はかなりのものである」と報告している(OECD, 2023)。それに対して日本では、いまだに国会議員からさえもLGBTの人々に対する差別的発言がなされており(岡田, 2019)、社会全体においてLGBTフレンドリーとは言い難い状況が問題化されている。近年の運動では、性的指向や性自認を理由とした差別からの法的保障の確立や同性婚の合法化を認めることが重要な活動とされている。

このような社会的状況を反映し、LGBT支援や当事者の可視化においても日本とドイツの間には違いが見られる。たとえば、ドイツでは多様な支援組織と運動組織が存在し、人種、移民、障害など複合的なマイノリティ問題に取り組んでいる。障害のある性的少数者への支援において、Jugendnetzwerk Lambda (ユースネットワーク・ラプダ)は「インクルーシブ・プロジェクト」を展開しており、RuT (ラッド&タット)は障害者であるレズビアンへのニーズを重視している。他にも多数の団体が当該問題に取り組んでいる(Sülzle and Rudek, 2019)。さらに、ベルリンでは性的マイノリティの歴史と文化に焦点を当てたミュージアムとリサーチセンターであるSchwules Museum (同性愛ミュージアム)が1985年に開設され、2023年には世界初の障害とクィアの交差をテーマにした展覧会¹が開催された。日本では、支援組織や運動組織が比較的少なく、東京や大阪のような大都市にはLGBTのコミュニティ・スペースがあるものの、ミュージアムのような公的施設はない。近年では、コミュニティの歴史におけるアーカイブの重要性が認識されつつあるが、障害のある性的少数者に関する文献資料や状況調査は不足している。

ドイツの障害のある性的少数者の生活状況調査によれば、偏見や差別を減少させるためには、障害のある性的少数者をより多くの人に知ってもらう必要があると指摘されている(Sülzle and Rudek, 2019)。自分のアイデンティティや差異、自己決定を祝う場であるパレードは、可視性の向上に寄与する重要な手段と考えられる。そこで本研究では、ドイツと日本のパレードを比較し、当事者の若者の運動参加について考察する。

3. 調査概要

本報告は、報告者が2021年から2023年にわたって実施した日本全国のパライド・パレードの調査と、2023年7月に実施したベルリンでの調査²に基づいている。報告者は現地のパレードに参加し、主催者と当事者の参加者に対してインタビューを行なった。

4. 考察

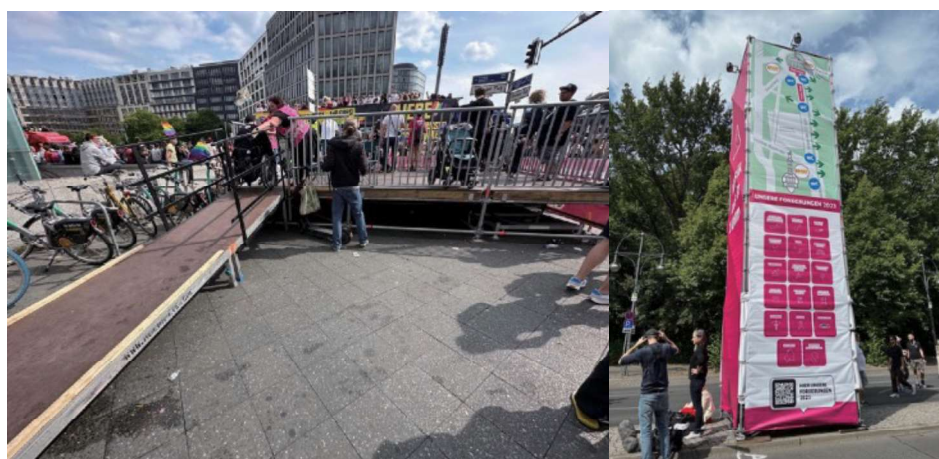
4.1 大規模なパレードイベント

まず世界中で知られている、国のなかで一番大規模なパレードイベントであるベルリンプライドと東京レインボープライドを比較する(表1)。

表1 ベルリンプライドと東京レインボープライドの簡概⁴⁾

| | ベルリンプライド 2023 (Christopher Street Day Berlin) | 東京レインボープライド 2023 (Tokyo Rainbow Pride) |
|-------|---|---|
| 開催日 | イベント 6月-7月 パレード 7月 22日、約 7km | イベント 4月 22日-23日 パレード 4月 23日、約 3km |
| 参加者数 | 約 50 万人 | 来場数 25 万、パレード参加 1 万 |
| スローガン | Be their voice - and ours! (かれらの声になり、私たちの声になろう！) | 変わるまで続ける Press on till Japan changes |

ベルリンプライドの参加者の中では車いすユーザーがかなり多く観察された。友達や両親と一緒に参加者だけでなく単独の参加者もいた。パレードルートは交通が制限され、誰でも自由に行進に参入退出ができた。さらに、道が狭く非常に混んでいる場所では車いすユーザーや障害者のための休憩スペースなどが用意されていた。また、ゴール会場の周辺には、トイレや注意事項が書かれた地図が設置されていた。このような光景は日本のパレードではなかなか見られない。



ベルリンパレードの休憩スペースとゴール会場周辺 (写真は筆者が撮影したものである)

実際、東京レインボープライドには車いすユーザーの参加者の姿はドイツに比べて少数であった。資料によれば2018年に「まぜこぜの社会」を実現しようとする車いすユーザーのチームがあったとされ、また2022年には主催側のゲストとして著名人である乙武洋匡氏が先頭を歩くことになったという。しかしパレードの行進は、通常の交通と同じ道路を利用しているため、基本的には事前登録をした人々だけが行進に参加する。限られた一般参加の車いすユーザーからは「会場がとても混んでいて、車いすで入れない」「ホームページで調べても車いすにとって便利なルートとかアクセスの情報が出てこない」「一人でパレードに参加するのは無理ですね」という感想が聞かれた（2023年4月インタビューより）。

これらの比較から当事者コミュニティ、複合的なマイノリティ性の可視化とパレードの参加のすべての面において、ドイツは日本よりインクルージョンを重視していることや、障害のある性的少数者の若者がパレードに参加しやすい状況が作られていることがわかる。

ただし、本報告は先進的なドイツに対する日本の現状を指摘することのみを企図したわけではない。これまで比較してきたのは大都市の目立った主流の活動、すなわち運動が組織化されており、イベント性の強い大規模なパレードである。こうした大規模パレードが商業化しているという問題はこれまでも批判の対象となってきた。ベルリンプライドではこうした批判への反省から、連帯意識やアクセシビリティの向上が見られている。東京レインボーパレードでは近年、商業化が過剰ではないかという批判も受けており、この点において、ドイツの事例は日本の参照モデルとなる可能性が考えられる。一方で、あまり注目されていない、より小規模なパレードや資源が少ない地方での運動は、日本においてもインクルージョンを重視した姿勢が見られる。

4.2 小規模な運動と地方での実践

約1000人が参加した東京トランスマッチ2022は、「ありえないデモ」³という若者を中心とするグループとも連携して、多様なマイノリティとの連帯意識を強調し、反トランス差別に抗議するデモが行われていた。進行の中で、手話通訳が付けられる場面もあり、LGBTのチームが手話通訳を通してデモに参加した。ドイツにおける類似するデモとして、ベルリンプライドのパレードの終了後、インターナショナルクィアプライド（The Internationalist Queer Pride For Liberation）が開催された。約12,000人が参加したこのデモの特徴は、反植民地主義、反人種主義、反資本主義を強く訴えていた。行進の先頭は、障害者のチームであった。このチームに参加する人はマスクの着用を要求された。さらに、スタッフはロープを使用して特定のエリアを確保していた。

日本の地方でも、主流のパレードと異なる実践が存在する。例えば、宮崎市で2022年に開催されるパレードは、十日間にわたり毎日少人数が参加する形態であった。歩く距離は市役所から県庁までわずか700メートルであり、障害者や体力のない者も参加しやすい。実際、障害女性のグループが参加していた。住路はプライド・パレードをし、復路はごみ拾い活動を行うというプログラムとなっており、少人数制の参加であることもあり、参加者同士が親しくなり、地域社会との密接な協力を感じることができたという声もあった。

また主流のパレードでは「happy pride」というマイノリティの誇りやプライドを前面に押し出す方針がよく見られるが、それに違和感を抱く者もいる。彼らは悩みや葛藤を抱えた自身の感情を無視せず、「ハッピー」な雰囲気は無理やり演出することをやめ、代わりに「陰気なクィアパーティ」というイベントを開催していた。例えば、東京ではレインボープライドの会場の隣の代々木公園で、静かにZine（小規模グループが作成した雑誌）や本を読んだり、または音楽を聴いたり、ぼんやり座ったりする集会が行われた。これらの実践はクィアという集合的なアイデンティティに基づき、承認を求めるために何か特定の行動を起こすよりも、特定空間での身体的・感情的な個人の経験を共有することを目的としており、McDonald（2004）が提示した経験運動的な実践として捉えられるものである。

4.3 主流の運動に居場所をもてない交差性をもつ個人の活動経験

最後に、ドイツと日本の3人の若者の語りを取り上げ、交差性を持つゆえに主流の大規模な社会運動には居場所が持てない個人の活動経験を示したい。

ベルリンに在住のアリスさんは、パレスチナにルーツを持つトランスジェンダーで、有色人種のトランスジェンダーコミュニティで活動している。このコミュニティはトランスジェンダーである人々の安全のためにクローズドな活動を行っており、主にSNSを利用して連絡を取り合っているが、対面交流スペースも設けられており、DIYイベントや自炊会などが行われている。アリスさんは「どこに行けばいいかわからないとき、とりあえずこのコミュニティに行けばなんとかなります」、また「障がいのある人が、どこかにいきたい、イベントに参加したいと思ったら、コミュニティ全員が協力してそこに連れて行ってくれます」と語った。このコミュニティは毎週日曜日にチャリティイベントを開催し、寄付やお互いの手助けで活動を支えている（2023年7月フィールドノートより）。

東京に在住の肢体障害がある銀河さんは、フェミニズム、クィアとディサビリティをテーマとしている芸術専門の大学生である。彼女は「障害の場所にもなじめないし、クィアな場所にもなじめなくて、どこにも居場所がないみたいなのはずっとある」「自分の

障害を考えるようになって、車椅子とクエアであること、どこにも行けないこと、なかなかバーとか行けないとか、考えて作品を作るようになった」と語る。彼女は、現在3DプリントやARなどデジタルテクノロジーを使った作品を中心に、SNSを活用して活動をしている（2023年11月インタビューより）。

北海道の車椅子ダンサーのユキノシタさんは、脳性麻痺かつトランスジェンダーであることで受けた多重的な差別経験についての講演や、LGBTユースの支援プロジェクトの企画などを行っている。自身の経験をパレードの主催側に伝え、パレードを変化させたいと思いで、昨年札幌レインボープライドのボランティア活動も始めた（2023年10月インタビューより）。

3人の活動はそれぞれ異なっているが、3人とも複合的なマイノリティ経験に基づいた実践を行っている。障害をはじめ他のマイノリティ性をもつ性的少数者の中には、商業化された大規模運動のような場ではない小さなコミュニティや、SNSなどを通じた企画などにおいてポジティブな活動経験を持っている。そうした実験的な営みの重なりを通じて、今後ドイツと日本の当事者の若者が交流し、国境を超えるネットワークを構築し、若者への支援や様々な活動の可能性が期待される。

5. 結論

LGBT運動を比較検討する際には、主流の大規模であり組織化され、商業化された運動に焦点を当てられがちである。本研究では、「障害のある性的少数者」の若者の社会運動への参加を検討することで、むしろ小規模な運動や地方での実践の可能性が示唆された。

商業化に抵抗する意識を持つ小規模な運動、または資源が少ない地方の運動は、多様な資源を動員するため、マイノリティ間の協力を強調している。このような活動と運動は、ほぼ組織化されていない段階であり、それゆえ障害のある参加者は主催者側との間で対話する余地を持ちやすくなり、これがアクセシビリティの向上や運動への参加の物理的、心理的な容易さをもたらしている。

さらに、本調査から、SNSを利用した活動や芸術作品を通じた既存の規範に対する批判、またポジティブな運動に対抗するための多岐にわたるアクティビズムの手段が存在することが示された。社会正義のアクティビズムは、必ずしも直接の行動やデモに限定されない。地方や小さなコミュニティは若者の運動参加と活動において、豊かで柔軟な発想をもつ場としての可能性を持っている。将来的には、障害、LGBT、地方での交差する視点に焦点を当てた考察を進めていきたい。

注

- 1) 2022年9月2日—2023年5月29日にSchwules Museumで障害/クィアの歴史、アクティビズムと文化に関する展覧会「Queering the Crip, Crippling the Queer」が開催された。
- 2) ベルリンで盗難があったため、一部の調査データが紛失した。
- 3) 「ありえないデモ」は国が生殖や性別のあり方に介入する現状を人権侵害とし、法改正訴える団体である。東京トランスマーチ2022への参加事情は公式サイトご参照 (<https://arienaidemo.bitfan.id/contents/95022>)

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様、ベルリン滞在中のChen Yitian氏、そして立命館大学小川さやか先生、富永京子先生に感謝を申し上げます。本調査は山岡記念財団およびJSPS科研費 (JP20J21415)の助成を受けて実施しました。

参考文献

- Collins, Patricia H. and Sirma Bilge. 2016. *Intersectionality*. Polity Press.
- Crenshaw, Kimberlé. 1991. "Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color." *Stanford Law Review* 43(6): 1241-99.
- Flores, Andrew R. 2021. "Social Acceptance of LGBTI People in 175 Countries and Locations." The Williams Institute. Retrieved December 12, 2024 (<https://escholarship.org/uc/item/1jg3s5jx>).
- 飯野由里子, 2019, 「『省略』という抵抗——障害者の性の権利と交差性」 『思想』 岩波書店, 1151: 52-69.
- Leonard, William and Rosemary Mann. 2018. "The everyday experience of lesbian, gay, bisexual, transgender and intersex (LGBTI) people living with disability." *No.111 GLHV@ARCSHS*, Melbourne: La Trobe University.
- McDonald, Kevin. 2004. "Oneself as Another: From Social Movement to Experience Movement." *Current Sociology* 52(4): 575-593.
- OECD. 2023. "The Road to LGBTI+ Inclusion in Germany." Paris: OECD Publishing. Retrieved December 12, 2024 (<https://doi.org/10.1787/977b463a-en>).
- 岡田桂, 2019, 「"不完全に"クィア——性的少数者をめぐるアイデンティティ/文化の政治とLGBTの『生産性』言説がもたらしたもの」 『年報カルチュラル・スタディーズ』 7:7-26.
- Shakespeare, T., Kath, G., and Davies, D. 1996. *The Sexual Politics of Disability*. London: Cassell.
- Stammers, Neil. 2009. *Human rights and social movements*. London: Pluto Press.

Sülzle, Almut and Freya Rudek. 2019. “Que(e)rschnitt Inklusion. Bestandsaufnahme einer inklusiven LSBTIQ-Infrastruktur in Berlin.” Berlin: CAMINO. Retrieved December 12, 2024 (https://camino-werkstatt.de/downloads/Queerschnitt-Inklusion_WEB.pdf).

杉浦郁子・前川直哉, 2022, 『「地方」と性的マイノリティ』青弓社.